

自閉症児の言語行動に関する評価(2)

— T-CLLBACの適用 —

板垣健太郎・杉山雅彦・大野裕史
伊藤健次・小林重雄

1. 目 的

本研究は、筑波大学知能障害研究室および東京教育大学特殊教育臨床研究室において治療教育を試みた自閉症児を対象に、その経過とT-CLLBAC (check list of language behavior in autistic children) およびT-CLAC (check list of autistic children) とによる評価とを検討し、T-CLLBACの有効性を考察するものである。

T-CLLBACは自閉症児の言語行動をチェックし、訓練の基礎を得、また、その変容を評価するために作成されたものであり、聴き取り(項目1, 2)ことば(項目3~10)読字・書字(項目11, 12)の12項目をそれぞれ5段階で評価するものである。T-CLLBACは、T-CLACと併用することによって、自閉症児の行動をall-overに把握することを前提としている。

2. 方 法

自閉症と診断され、筑波大あるいは東京教育大において(原則として)週1回1時間の治療教育的取り扱いを受けている児童を対象とする。訓練過程での行動(の変化)が、T-CLLBACおよびT-CLAC(インテイク時1回、訓練過程において2回の計3回適用)にどのように反映されるかを検討する。

3. 症 例

症例1 T.S.児 昭和48年3月生 男児

(1) 生育歴

胎生期異常なし。吸引分娩で出産、出産時体重3050g。生後3ヶ月頃より泣かなくなり、おとなしく育てやすい子となった。1歳2ヶ月で歩行開始後は、落ち着かず無目的な動きをすることが多かった。1歳頃より商標に対する固執が生じ、とりあげるとパニック状態に陥った。2歳頃より自己刺激行動が顕著となり、家庭内で孤

立するようになった。2歳半より某精神薄弱児施設に通園を開始したが、施設内でも指示に従えず、孤立することが多かった。

(2) インテイク時(S.5.2.4. 4歳1ヶ月)の状況

動きにまとまりがなく、目的的な行動が認められなかった。名前を呼んでも全く反応がなく、課題に対しても注目することがなかった。頭や腕をたたく、顔面をこするといった自己刺激行動が顕著にみられた。母親に対してはクレーン現象で要求することがあったが、それも本児からの一方的な要求であった。他の人間に対してのかわりは皆無であった。ことばはなく、奇声の生起頻度が高かった。

(3) 訓練過程

S.5.2.4より訓練を開始し、当初は学習態度の形成を目的とし、着席、自己刺激行動の消去等を訓練した。また、奇声の生起頻度が高く、ことばになりうると考えられる発声の頻度が低かったため、奇声は無視しその他の発声を強化した。また、ことばの訓練の前段階として動作模倣訓練——口形・音声模倣訓練・受け渡し——カラーマッチング——絵カードの弁別訓練を行った。その結果S.5.3.4.には奇声はほぼ消失し、発声頻度は増大した。また、口形・音声の模倣および絵カードの弁別が可能となった。

S.5.3.4.からは模倣訓練、弁別訓練を継続すると同時に命名訓練を行った。その結果、S.5.4.4.まで「手」、「くつ」等18語の命名が可能となった。また「ハイ」「チョーダイ」等の使用も可能となった。

(4) CLLBAC及びCLACの過程

本児はインテイク時にはことばはなく、奇声の頻度が高く、CLLBACにおいてもほとんどが段階1にとどまっている。しかし、その後奇声が消し音声の模倣が可能となり、S.5.4.3.にはことばがコミュニケーション手段として機能し始めていることが明確に示されている。また、絵カードの弁別等の単語の理解が可能となった過程はCLLBACよりむしろCLACにあらわれて

いる。(Fig. 1)

CLACにおいても当初はほとんどが段階1にとどまっていた。しかし、発語前(S.53.4)には運動機能(模倣)、課題解決、対人関係に顕著な改善が認められる。いわゆる自閉症状の改善がこれらにあらわれている、といえよう。(Fig. 2)

ことばは社会的なコミュニケーション手段であり、社会性の改善が発語と密接に関連していることが考えられる。

T-CLL BAC PSYCHOGRAM

case: T.S.

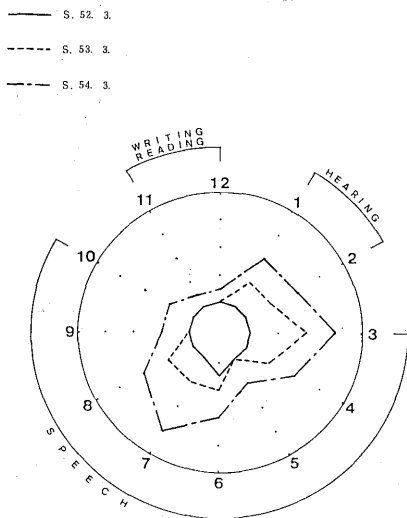


Fig 1

T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE T.S.

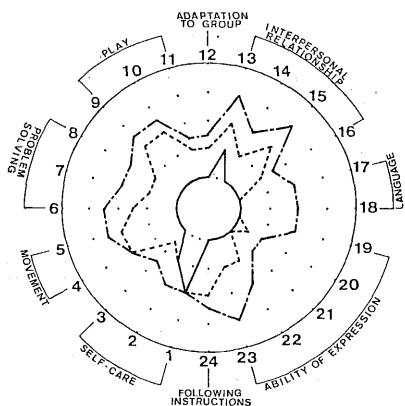


Fig 2

症例2 E.S.児 昭和45年10月生 男児

(1) 生育歴

吸引分娩で出産、出産時体重3770g。乳児期には特に問題はなかった。1歳1ヶ月で歩行を開始し、その後1歳半頃より多動となり、指示に従わない、視線が合わない等自閉の特徴が顕著となった。2歳後半から母親と共生状態となり、母子分離が困難となった。3歳6ヶ月で某幼稚園へ入園し、集団の中にいることができるようになり、また身辺自立も可能となった。

(2) インテイク時(S.50.8. 4歳11ヶ月)の状況

母子分離が困難であり、訓練室へ誘導しようとするときと激しく抵抗した。多動で落ち着きがなく、着席はするがすぐに立とうとした。視線の動きが激しく、ほとんど訓練者あるいは課題を見ようとはしなかった。奇声の生起頻度は高かったが、「ハイ」「バイバイ」等、数語の発語を確認した。

(3) 訓練過程

本児は当初不適切行動、多動な状態が顕著であったため、着席訓練、奇声等不適切行動の消去を行った。また、ことばを有しているとはいっても非常に限られた範囲であったため、動作模倣訓練 — 音声模倣訓練 — 命名訓練を行い、語いの拡大を図った。その結果、S.51.4には不適切な行動はほぼ消失し、あるいは訓練の進行上問題にならない程度に減少した。また、20語の命名が可能となった。

S.51.4からは命名可能語の拡大を継続すると同時に、2語文の使用の訓練が行われた。また、就学の準備として、文字学習、数学習が訓練に導入された。その結果、S.52.4までに身近な物に対する自発的な命名、2語文以上での応答が可能となった。文字学習では文字読みからさらに単語の読み書きが部分的に可能となっている。

(4) CLL BAC およびCLAC の過程

本児はインテイク時には限定されたことばしか有さず、そのレパートリーの狭さがCLL BACにあらわれている。しかしその後奇声が消失し、発声レパートリーの拡大、単語から文の使用が可能となる等の変化があらわれている。また同時に聴き取りの段階が上昇してきている。すなわち、ことばがコミュニケーションの手段として成立し、その範囲が拡大する過程が示されているといえよう。S.52.4には読み、書きが限られた範囲であるとはいえ、可能な状態に至っている。(Fig. 3)

CLACではインテイク時には遊び、対人関係の領域での段階が低かったが、S.52.4にかけて顕著な改善

を示している。また課題解決においても進展が認められ聴き取りも含めた言語面での改善と同時に、本児の行動範囲も拡大されていったといえよう。しかし、言語面での改善と行動範囲の拡大のどちらが先行したかについては問題とされる。(Fig. 4)

T-CLLBAC PSYCHOGRAM

case: E. S.

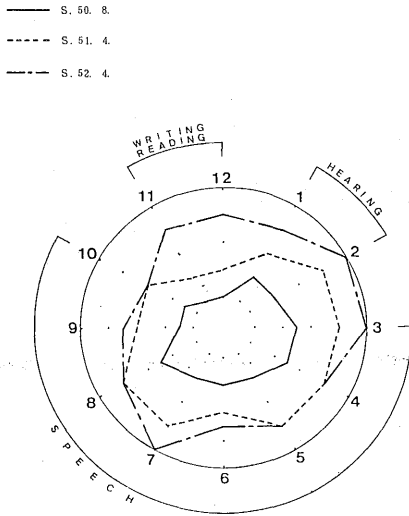


Fig 3

T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE E. S.

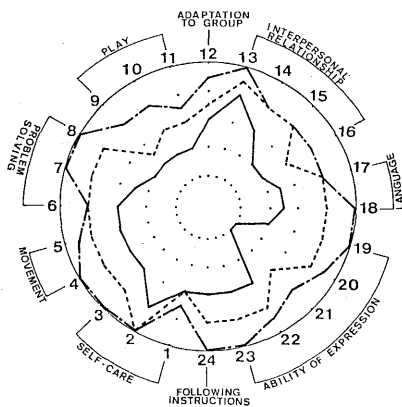


Fig 4

症例3 M.I.児 昭和47年6月生 男児

(1) 生育歴

早期破水により、帝王切開で出産。乳児期にはおとなしく、あまり泣かずよく寝ていた。生後11ヶ月で歩行開始後は多動となった。2〜3歳頃はほとんど人とかかわりを持たず、一人遊びをしていることが多かった。3歳過ぎから明瞭な発音ではないがエコラリックな反応が生じるようになった。しかし、ことばにはならなかった。4歳時に頭部打撲で頭蓋にヒビが入ったが、後遺症は認められてはいない。

(2) インテイク時 (S. 53. 3. 5歳9ヶ月) の状況

簡単な指示にはよく従い、名前を呼ぶと反応した。しかし、本児の好む課題であってもその注意集中の時間は短かく、落ち着かなかつた。エコラリックな反応が顕著であり、2〜3音程度ならばそれらしく模倣するが、全く応答にはならなかった。また、本児の構音はエコラリックな反応の際もその明瞭度は低かった。

(3) 訓練過程

本児は当初エコラリックな反応が強く、しかもその発音は明瞭ではなかった。したがって、音声模倣訓練を用いた構音の改善と同時にエコラリックな反応の消去を行った。続いて命名訓練および呼名訓練を行った。その結果、S. 54.4には40語の命名が可能となった。また、呼名に対する反応「ハイ」が可能となり注意の集中時間が長くなってきた。発音はやや明瞭度を増し、単語ならば了解可能となった。

S. 54.4からは命名訓練及び構音訓練を継続し命名可能な単語の増大を図ると同時に、2語文を用いての要求の訓練および2語文による状況描写の訓練を行った。また、本児が小学校に入学したため、読字・書字の訓練を開始した。その結果、S. 54.9には「〜チョーダイ」等2語文の使用が可能となり、文字の読み書きが一部可能となってきている。

(4) CLLBACおよびCLACの過程

本児はインテイク時にはエコラリックな反応のみでコミュニケーション手段としてのことばは持たなかった。しかし、S. 54.9までに2語文の使用が可能となっており、CLLBACでは特に要求・対応で顕著な改善が認められる。また、聴き取りにおいても改善が明確にあらわれており、input・output相方での改善がなされたことが示されている。しかし、要求に比し対応Ⅱ)での伸びが悪く、質問あるいは呼びかけに答える際には、なおエコラリックな反応が残存していることが示されている。また、構音はS. 54.4からS. 54.9まで段階は

変らず、今後の本児に対する訓練の課題の一つが構音の問題であることは明らかといえよう。(Fig. 5)

CLACにおいても、すべての領域において顕著な改善が認められる(Fig. 6)。CLL BACとCLACの評価から、本児は言語面のみではなく、対人関係も含めて全体的な進歩改善を示しているといえよう。

T-CLL BAC PSYCHOGRAM

case: M.I.

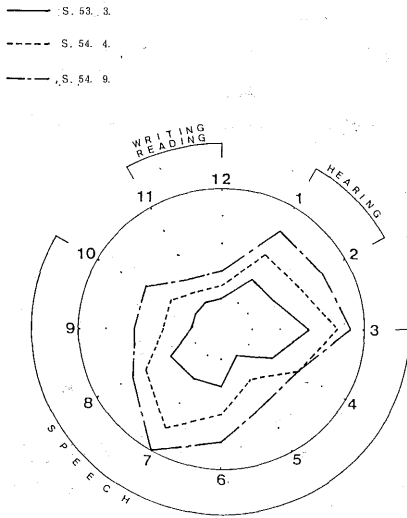


Fig 5

T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE M.I.

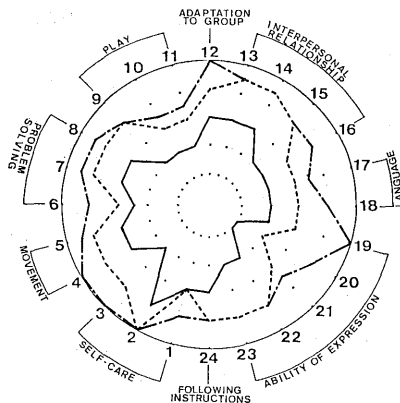


Fig 6

症例 4 K.O. 児 昭和 4 8 年 8 月 生 男 児

(1) 生育歴

妊娠 2, 3 ヶ月頃, 切迫流産の心配。満期出産, 出産時体重 3140 g, 後産が遅れた。始歩は 1 歳頃であるが転んで頭を打つことが多く, 強打したこともあった。生後 1 ヶ月頃から顔をのぞきこむと「オーオー」と呼びかける感じがあったが, 2 歳になってもことばが遅く, T, V. のコマージュが断片的に出た程度である。また, 落ち着きが無く, 視線が合わなかった。要求は親の手を引いて行った(クレーン現象)。某医大のことばの治療教室で「受容」を強くすすめられた。その結果, 母親に親しみをみせるようになり, エコラリアが出現したもののわがままで思い通りの生活ぶりであった。3 歳頃, 数種の物に対する命名と「ゴメンナサイ」「モウイヤ」などの反応(強制や禁止に対して)が出現した。4 歳時には場面に合致した「イタイ」「ママ」等が自発するようになった。また, 商標類, 物を並べること等の固執行動が出現した。当時, 時々迷子になることがあった。

(2) インテイク時(S. 53.6, 4 歳 9 ヶ月)の状況

母子分離に強い抵抗を示し, 多動で落ち着きがない。着席は困難。発語はみられるが, その範囲は狭い。(家庭でも)勝手な行動が多く, 指示に従うことができない。迷子になることも続いている。ミニ・カーが好きできちんと並べたり(他者が崩すとパニックを起こす), ためつすがめつして眺めている。

(3) 訓練過程

昭和 5 3 年 6 月開始, 当初は母子分離と訓練への抵抗が強く, 母親に近くに居てもらう。抵抗は数回で減少したが, 落ち着きがなく, 勝手な行動が多いので課題に注意を集中すること, 指示に従って行動することを主なねらいとして, 型ハメやパズル, 描線などの課題を行った。これらを通して, 学習態度が形成されてくると, 弁別課題(色・形・大小) 動作模倣, 命名訓練といった基本的な課題を導入。S. 5 4 年 4 月からは, 2 次元弁別, トレーシングやコピーイング, 文字と絵のマッチングなども導入している。

(4) CLL BAC と CLAC の過程

T-CLAC では, 訓練内容と対応して, 対人関係や課題解決能力での改善がみられる(ただし, 同年齢児との対人関係の評価は低い段階に停滞)。一方, CLL BAC においては, 「指示の理解」, 「要求」, 「対応(1)」での改善がみられるものの, 全般に顕著な変化は認められていない。また, 「発声」, 「構音」の評価段階が高いのに比し, 他の項目がより低い段階に停滞している。

このことは、対人関係が non-verbal なレベルでは改善がみられるものの、verbal なレベルでのコミュニケーションの発達が遅れている状態と考えられ、同年齢児との対人関係や抑揚・リズムの問題も残されているものの、対応や会話などの側面の指導をより有効に進めることの必要性を示唆しているものと考えられる。

(Fig. 7, 8)

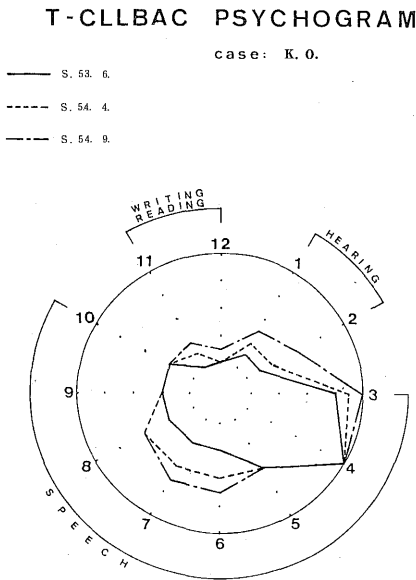


Fig 7

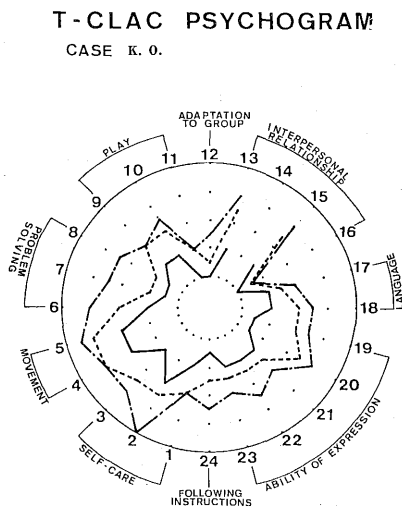


Fig 8

症例 5 R.O. 児 昭和 4 6 年 5 月 生 女 児

(1) 生育歴

胎生期一胎産予防の注射，食欲増進剤の投与などを受ける。逆子で出産。始歩は 10 ヶ月。始語 2 歳の終わり頃。普通の子のように泣かないおとなしい子であった。2 歳頃，ひとり遊びを好み，気にいったことは長時間続ける，落ち着きがない，テレビの CM を好む。2 歳 9 か月から 3 歳 10 か月まで国立 Y 大学で指導を受ける（両親から離れ，祖父母の家で生活）。

(2) インテイク時 (S. 50. 4. 3 歳 11 か月) の状況

祖父母のもとから父母および弟と一緒にの生活に戻り，母親との極端な共生関係が生じていた。生活習慣に関しては，食事については箸もスプーンも使用可。脱服はなんとかひとりでき，着服は介助が必要。排泄はひとりでトイレに行くことができた。

プレイルームでは落ち着きがなく，休みなく動き回り呼びかけにも特別な反応が無い。しかし，全くの無関心ではなく，しばしば訓練者の行動を見ている。働きかけに対しては拒否反応が非常に強く，訓練者が接近すると奇声を発して逃げる，という状態であった。

(3) 訓練経過

昭和 50 年 4 月開始。当初は，母親同室でプレイルームへ誘導，母子分離と拒絶反応の消去をはかる。10 セッションまでには分離でき，着席，呼名反応，注意集中の持続など，基本的な学習態度の形成をねらい，パズル，カラーブロック（色の弁別，デザイン構成），描線等の課題を導入。これらの学習は順調に進み，51 年 5 月からは，数概念，言語能力の拡大を中心に導入し，（半）具体物と数詞との結合，色や大小に関する形容詞と名詞の結合，の学習を導入。52 年 3 月までに二次元刺激の弁別，文字の読み（絵カードのマッチング→模倣読み→ひとり読み），書き（トレーシング→コピーイング）へと学習を進めた。

52 年 4 月からは，文字言語の理解，数概念の拡大に関する課題を中心に行い，小学校入学時までに事物の命名，読み，事物と文字のマッチング，文字のトレーシングやコピーイングなどが可能となり，数概念に関するものについては，7 までの数唱，4 までを 1 対 1 対応で数える，数字を読む，数字をトレーシングする，コピーイングする，指示により書く，といったことが可能となった。

小学校は普通学級に入級したが，授業参加時間が大幅に制限される（部分参加）などのことがあり，学校での学習はほとんど進歩がみられない状態であった。家庭に

において訓練を継続した結果、2年進級時までに具体物を用いての簡単な加算、言われたことばを書く(ひらがな)簡単な文章を読みとる、といったことが可能になっている。

(4) CLLBACとCLACの過程

1回目のチェックから2回目のチェックまでは3年経過しており、この間、CLAC全般とCLLBACにおける「聴き取り」、「ことば」の項目に伸びが示されており、3回目のチェックまでには、訓練内容と対応して、CLLBACにおける「読字・書字」の項目での大幅な進歩が示されている。また、対応の状態が長く受身的であったものが、2〜3回目のチェックの間により積極的な方向へと移ってきていることがみられる。(Fig. 9. 10.)

T-CLAC PSYCHOGRAM

CASE: R. O.

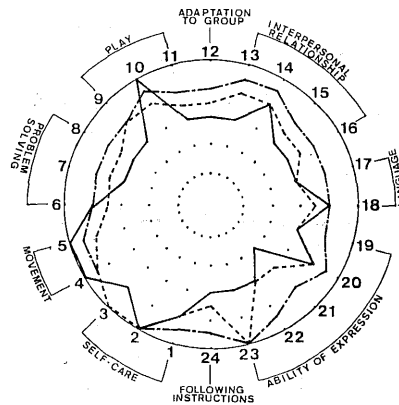


Fig 9

T-CLLBAC PSYCHOGRAM

case: R. O.

- S. 50. 4.
- - - S. 53. 3.
- · - S. 54. 3.

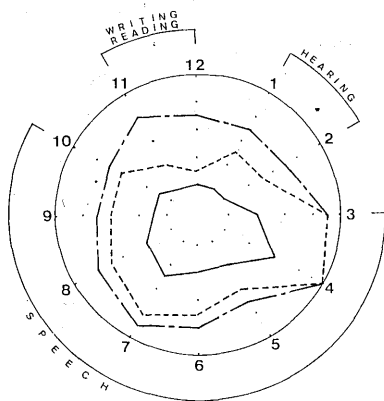


Fig 10

4. 考 察

T-CLACを指導過程の評価として適用した場合、特に、言語訓練場面での評価が不十分であることが問題とされた(池ら, 1978)。すなわち、発声の仕方、発声量の変化、ことばの内容などの変化、対応が受身的であるか積極的であるかという状態像を明確に表わすことは困難である。T-CLLBACは、これらの問題を補いより正確に対象児の状態を捉えることを意図して作成された言語面のチェック・リストである。以下では各症例毎に、CLACとCLLBACに反映された状態像を検討する。

症例1では、CLACにおいては動作模倣、課題解決、対人関係での大きな変化が示され、自閉症状全体の改善が示されているとみられる。また、CLLBACにおいては、無発語の段階からことばがコミュニケーションの手段として機能し始めている段階までの変化が明確に表わされている。

症例2においても、CLLBACにことばのレパトリーが拡大し、聴き取りの面でも進歩が認められ、T-CLACにおいても行動範囲全般が拡大していることが示されている。

症例3では、CLLBACにおいてエコラリックな反応のみであったものが、二語文の使用が可能となり対応、要求などがコミュニケーション手段としての機能をもつ段階に至り、聴き取りにおける改善も認められる。一方、対応(Ⅱ)における伸びが停滞しており、応答の際の受身的態度が示され、構音でも3段階での停滞がみられている。CLACにおいては全般的な改善を示している。

症例4は、訓練者との対応関係(やりとりや指示に従って行動すること)の改善や基礎的課題を中心にプログラムが構成されたが、これらを反映してCLACにおいては対人関係や課題解決の項目で進歩がみられ、これと対応してCLLBACにおいても指示の理解、要求、対応などでの変化がみられる。また、CLLBACには、対応関係が受け身的な段階に停まっていることが示されている。

また、症例5では、インテイク時と2回目のチェックまでの期間が長い、CLACでの全般的な伸びとCLLBACでの「聴き取り」「ことば」の全般的な伸びが認められる。一方、3回目のチェックまでは、数や文字を中心とした学習を進めた時期で、CLLBACにおいて、「読字・書字」の2項目が大きく伸びている。

これらを言語行動の変化のチェックという点からみると、各症例においてT-CLACにおいては明確に示されない状態をT-CLLBACが良く示しているといえる。逆に、症例1にみられるように単語の理解が可能となった過程がCLACに示されている、という場合もあるが、いずれにしろ、CLACとCLLBACとは相互に補完することによって、対象児の状態をよりall-overに把握することを可能にすると考えよう。

さらに、「要求」と「対応(Ⅰ～Ⅲ)」の項目は、対象児の働きかけの積極性の程度を示す項目から成り、発声頻度の問題も「発声」の項目により、明確にされるようになった。

症例3のようにある程度の期間が経過しても、ある段階に停滞している項目が存在する場合があるが、その項目に関しては変容の困難さがうかがわれる。またそれらは、その後の指導の課題となるものであることを示唆するものと考えられる。

さらに、CLACとCLLBACを併せて検討した場合、その変化と訓練内容との対応関係がみられる。症例1、3では、聴き取りやことばでの大きな変化が訓練内容と対応しており、症例2、5のように2回目と3回目のチェック間で読字・書字の訓練が行われた例では、その伸びが顕著である。また、症例4においては、訓練者

との対応関係を形成することを中心に訓練が進められたが、CLACでもCLLBACでも対人関係や対応に関する項目で伸びが示されている。しかし、CLLBACにおいては、ほとんどの項目が3段階以下での変化であり、形成されている対応関係は受身的なものであり、今後、より積極的な形での対応関係を形成することの必要性が示唆された。

基礎的発話能力としての発声、構音、抑揚・リズム(CLLBACの項目3～5)の異常と対人関係を含むコミュニケーション機能(項目6～10)の異常とに分けて考えた場合、発声、構音、抑揚・リズムなどが不十分であるとコミュニケーションとしてのことば(要求、対応、会話)での発達も制限されると考えられる。今回、症例として取り上げたものについて基礎的発話能力としての項目3～5における評価段階とコミュニケーション機能としての項目6～10の評価段階とを比較してみると、項目6～10の段階が項目3～5の段階を大きく越えることはなく、両者が同程度の段階にあるか、6～10項目の段階がより低い段階に停滞しているかである。このことから発話の基礎的能力(3～5項目)と対人関係を含むコミュニケーション機能(6～10項目)との間に大きな差異のある場合は、対象児の対人関係について検討を加え(CLACの「対人関係」などの検討)、対人関係の改善を計る方向でのプログラムを考えるか、コミュニケーションのスキルの訓練を行うか、といった訓練内容について吟味していくことが必要と考えられる。

以上、まとめる

①T-CLLBACはT-CLACでは明白にできない言語行動の諸側面を把握することができる。

②T-CLLBACは、対応における状態(受動的か能動的か)も示す。

③T-CLLBACを継続して記録した場合、特に変容の困難な点が明確にされることがある。

④T-CLACとT-CLLBACには、訓練の内容を反映されることが多い。

⑤T-CLLBACに現われた問題をT-CLACのプロフィールとの関連において吟味できた症例もあった。

以上より、T-CLACとT-CLLBACを併用することによって、対象の状態をより正確に把握することが可能であり、訓練のてがかりや指導過程へのフィードバックのための基礎が提供されるものと考えられる。

なお、実際の記入にあたっては、ある段階から次の段階への移項段階にあるものについては、中間評価(例3は通過しているが4としては不十分である場合に3.5

と評価する)を適用するのが適当であろうと考えている。

参 考 文 献

- 池 弘子・他(1978):自閉症児の指導過程に関する研究(2) — T-CLACによる追跡 —
心身障害学研究 2. 109-118.

Summary

The Study on Evaluation of Language Behavior in Autistic Children (2)

—Discussion on the evaluation by T-CLLBAC—

Kentaro Itagaki, Masahiko Sugiyama, Hiroshi Ono,
Kenji Itoh and Shigeo Kobayashi

In this study, the autistic children who has been treated or treating therapeutically at University of Tsukuba and/or Tokyo University of Education were evaluated by T-CLAC and T-CLLBAC, and we discussed how T-CLLBAC (check list of language behavior in autistic children), which was designed to make up the incompleteness of T-CLAC, can express the behavioral feature and the ability of language in autistic children.

Method

5 cases (4 boys and girl, ages at intake — 3:11—5:9, periods of training — about 1 year to 3 years) were picked up. The outlines of the proceedings of training and modification process in each case were described, and T-CLAC and T-CLLBAC (checked at intake and 2 times on process of therapeutic approach) were presented. We examined how the latter reflect the modification of each in proceedings of training.

Result and Discussion

The results are summarized as follows.

- (1) T-CLLBAC makes clear some details of language behavior in children which were neglected on the scales of T-CLAC.
- (2) T-CLLBAC also shows the level of interrelationship with others (passive or active).

(3) It could be pointed out on T-CLLBAC that there is some aspect to be unmodified.

(4) Profile of T-CLAC and T-CLLBAC tends to project contents of training.

(5) We discussed the typical profile appeared on T-CLLBAC in comparing with those of T-CLAC.

It is demonstrated therefore that we can evaluate the behaviors as a whole in autistic children, and get a clue to start a training program or to examine a training process by using T-CLLBAC with T-CLAC.